

会場の床はベルベットの赤絨毯をイメージしたワインレッド、壁は落ち着いたベージュ系統でまとめる。
かつての西洋の貴族の館を思わせるような高級感に溢れる雰囲気にする。

体験型展示ということで、ブロックごとに当時の雰囲気を踏まえたうえでのシチュエーションを造る。

- ①・・・ポスター・『はじめに』(概要説明)パネル展示、チラシ置き場
- ②・・・第1ブロック:『煌』
 礼服の実物および礼服を着ている様子が描かれた絵画を展示
 当時の貴族のおしゃれマナー「つけほくろ」についての体験展示および解説パネル展示
- ③・・・第2ブロック:『華』
 実物およびそれを着ている様子の写真や絵画を展示
 当時の食事に関する「テーブルマナー」についての体験展示および解説パネル展示
- ④・・・第3ブロック:『微』
 実物およびそれを着ている様子の写真や絵画を展示
 貴族の主流の飲み物「紅茶マナー」についての体験展示および解説パネル展示
- ⑤・・・第4ブロック:『爽』
 日本で礼服として着用し出した頃の実物およびそれを着ている様子の写真や絵画を展示
 現在も使用する機会が多い「ビジネスマナー」についての体験展示および解説パネル展示
 現在のスーツの実物展示
- ⑥・・・『おわりに』パネル展示

実物の軍服・スーツを展示する場合は、ガラスケースに入れ、四方から見るようにする(上右図参照)。
 ガラスケースは展示品に紫外線等のダメージを与えない、人がぶつかっても問題ない等の特徴を持つ素材を使用する。

写真・絵画の展示においても各展示品の保護の必要性に応じて素材を選択する。

関連イベント

ワークショップ【タイムスリップ!?マナー体験】

コンセプト

「礼服」や「マナー」という言葉から連想される「堅苦しい」「面倒くさい」などのマイナスイメージの払拭を目的する。体験型展示という点を活かし、展示会場の各時代のブースで行う。過去の西洋の礼服(レプリカ)を実際に着用してもらい、当時のマナー(紅茶の淹れ方)を実演指導のうえ体験してもらう。自分がその時代の人間になりきって、礼服とマナーを面白く、楽しく学んでもらう。

内容

【紅茶の淹れ方体験】

紅茶の本格的な淹れ方を体験してもらう。
ティータイムも兼ねてケーキなども楽しんでもらう。

対象年齢等

年齢・性別等は一切不問。親子や夫婦、友達同士、恋人同士など誰でも参加可能。

事前予約について

事前予約制(先着順)とする。
申し込み方法はWeb(F&M公式ホームページ)および電話での申し込みとする。
着用する衣装および使用する道具はこちらで用意する。

参加費

1名:400円

定員

30名程度を目安とする。

ギャラリートーク【礼服の変遷】

展示品についての解説をする。
展示品に関するこぼれ話や面白い話があれば、それを話す。

対象年齢等

年齢・性別等は一切不問。親子や夫婦、友達同士、恋人同士など誰でも参加可能。

事前予約

事前予約不要。当日の予定時刻までに会場へ来てもらう。

参加費

無料

定員

定員は設けない



モードと聞いて、どこを思い浮かべるだろうか。パリ・コレクションなど、多くの流行を発信しているフランスを思い浮かべる方が多いのではないだろうか。そのイメージの定着が始まったのが、17 世紀だ。

それまで、モードの中心はスペインだった。大航海時代を迎えたスペインは服飾だけでなく、言葉通り世界を握っていた。しかし、17 世紀にはいるとスペインからオランダが独立し、経済の担い手はオランダへと移る。モードも同じようにオランダ風の動きやすい服がヨーロッパへ広まる。

しかし、オランダは英蘭戦争によって勢力を失い、次に力を握ったのがフランスだ。フランスは絶対王政を確立させ、ヨーロッパの頂点へ躍り出た。ヴェルサイユ宮殿で新しい服装の流行が生み出され、ヨーロッパへ伝わるという、モードの発信地として機能し始める。

フランスから流行が発信されるようになると、男らしさや威勢の良さを華やかに誇示する騎士風の服装が流行した。

スペイン式の高く首を覆う襟は廃れ、現代の襟の構造と同じ、折り返しの式の襟が登場した。現代の襟より随分大きく作られ、レースでトリミングされた襟は肩まで覆われていた。また、それまでの詰め物入りの短いズボンは、ゆったりした膝下丈のズボンへと変化する。

また、このような騎士風の服装が流行りだし、マントや長靴などの小物も流行し始める。髪型は長髪が流行り、男らしさを誇示する口髭やステッキも流行した。

ヨーロッパではルネサンスと宗教改革の嵐により中世的な世界観に変わり、近世的な新しい世界観が生まれた。それに伴い、服装も各国で独自のモードが流行した。

神聖ローマ皇帝カール5世(スペイン王)が力を持つようになると、スペイン・ファッションがヨーロッパ中に広がることになる。大航海時代を迎えたスペインは「日の沈まぬ帝国」と呼ばれていた。

スペインモードは、技巧的・豪華絢爛で硬いシルエット。ぴっちりと糊付けされ、風にもなびかない重厚な作りだった。特徴的なものは、高く首を覆う襟で、レースなどで飾り付けられていた。厳格なスタイルを重視したスペインモードは禁欲的で露出を嫌い、モノトーンが好まれた。この時代すでに黒が再認識されており、スペインでも黒が流行していた。

ズボン、ドイツで始まったスラッシュが装飾的な意味合いを持ち、スペインモードにも取り入れられている。

足先まで包んでいた中世の布タイツは駆逐され、かわりにスペインでシル stockings が発明される。これが英国では、当初は王様ですら入手困難な貴重品だった。絹では高すぎるので、英国ではジャージーやガーゼなど高級ニット製品が出回る。



作品リスト・解説



イギリス・フランスの百年戦争が続いていた頃。

15 世紀は、黒が再認識され、流行色となった。以前は、黒は貧しさや醜さを表す色だった。それは当時、黒を美しく染める技術がなかったためである。14 世紀半ばのイタリアで贅沢禁止令が出され、強制的に黒を着せられるようになると、美しい黒の絹織物の開発が進んだ。中世末期には漆黒の美しいブリュネットやピロードが生産されるようになり、黒に対する認識が変わった。ともなう、黒自体の色合いのバリエーションも増えた。

贅沢禁止令は十三世紀から十六世紀の間に、くりかえし発令された。華美な服装を禁じて衣服による身分制を保持する目的のほか、たとえば敵国の布地や染織物が流行したとき、その貿易を禁じて金が流出するのをふせぐ意味もあった。(禁じることでかえってその織物の価格高騰を招くこともあった)

黒服流行のさきがけとなったのは、ブルゴーニュ公国のフィリップ善良公(1396-1467)である。ブルゴーニュ公国は、中世にフランス東部からドイツ西部に位置しており、14 世紀半ばから 15 世紀半ばにかけて華やかな騎士文化がおこり、ヨーロッパでも随一の経済的・文化的豊かさを誇っていた。

フィリップ善良公は、父のジャン無怖公の暗殺後、喪服を着続け、彼の姿は黒ずくめで描かれるのが通例となった。フィリップ公自身は喪の意味で黒を着ていたが、それがキッカケで、黒は彼の宮廷を中心に男性・女性を問わず着用されるようになる。

逆に、十五世紀頃には黄色い服が卑しいとされ、道化を除いてほとんど着られることがなかった。

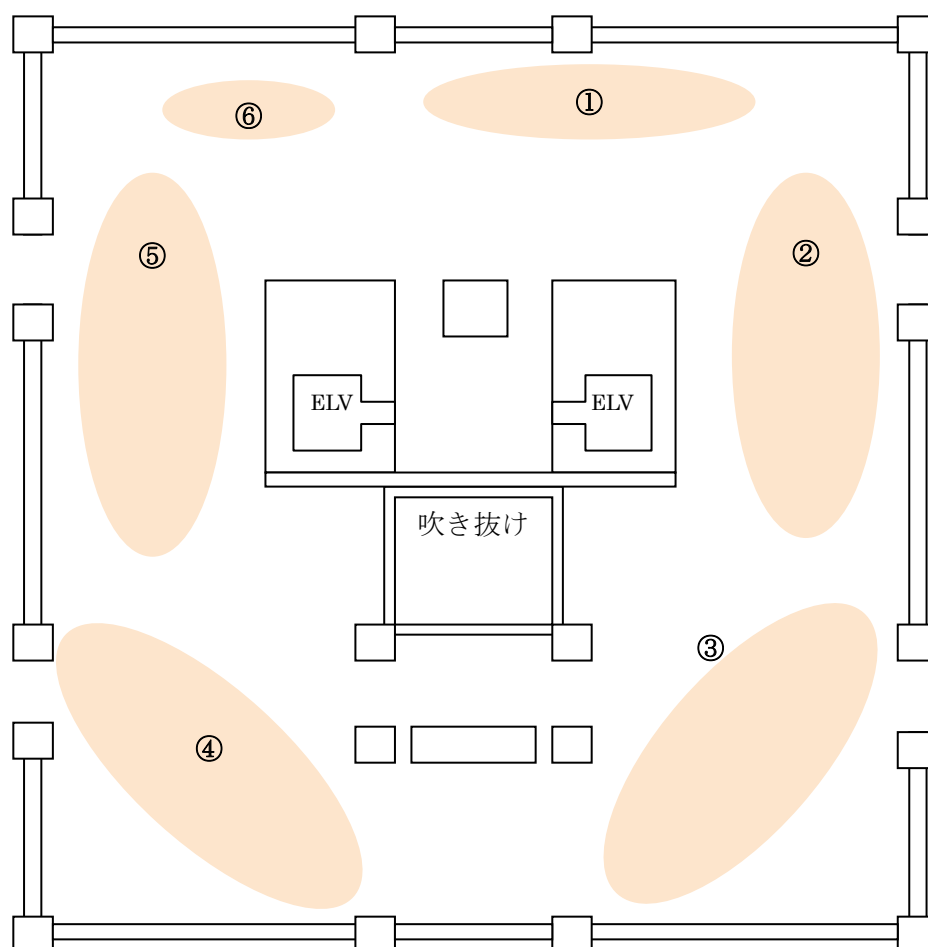
16 世紀を特徴づける服飾の最たるものは、オ・ド・ショース(ズボン)の股間につけられたブラケットだろう。ブラケットは、中世ドイツから生まれたファッションだった。ドイツでは「ラッツ」フランスでは「ブラゲッド」、英国では「コッドピース」の名で呼ばれた。

中世ドイツで誕生した時には実用的な目的だったが、後にヨーロッパで流行する際には、実用というより男性器の誇張という時代の好みによっていた。本来はズボンの前開きだが、詰め物がされるなどして大仰に整えられていた。

当初はこれを破廉恥と見る向きもあったが、16 世紀に入ると貴族・王族の服装として、当たり前に着用するようになる。

英国王カール 5 世の肖像画でも、密着した短パンとタイツの上に、カバーをかぶせたようなブラケットがはっきりと見える。その他にも、服全体に飾り穴や切り込みを施し、下に着ているシュミーズの覗かせ方で個性を出していた。飾り穴は、ベストや袖、オ・ド・ショースに留まらず、靴にも施されている。また、ヒダ状の襟、羽根付きの帽子、肩にちょこんと乗せたマントのような布なども当時の流行りだった。

会場レイアウト(詳細は模型参照)



- ・会場の床はベルベットの赤絨毯をイメージしたワインレッド、壁は落ち着いたベージュ系統でまとめる。かつての西洋の貴族の館を思わせるような高級感に溢れる雰囲気にする。
- ・体験型展示ということで、ブロックごとに当時の雰囲気を踏まえたうえでのシチュエーションを造る。

①・・・ポスター・『はじめに』(概要説明)パネル展示、チラシ置き場

②・・・第1ブロック：『煌』

礼服の実物および礼服を着ている様子が描かれた絵画を展示

当時の貴族のおしゃれマナー「つけぼくろ」についての体験展示および解説パネル展示

③・・・第2ブロック：『華』

実物およびそれを着ている様子の写真や絵画を展示

当時の食事に関する「テーブルマナー」についての体験展示および解説パネル展示

④・・・第3ブロック：『激』

実物およびそれを着ている様子の写真や絵画を展示

貴族の主流の飲み物「紅茶マナー」についての体験展示および解説パネル展示

⑤・・・第4ブロック：『爽』

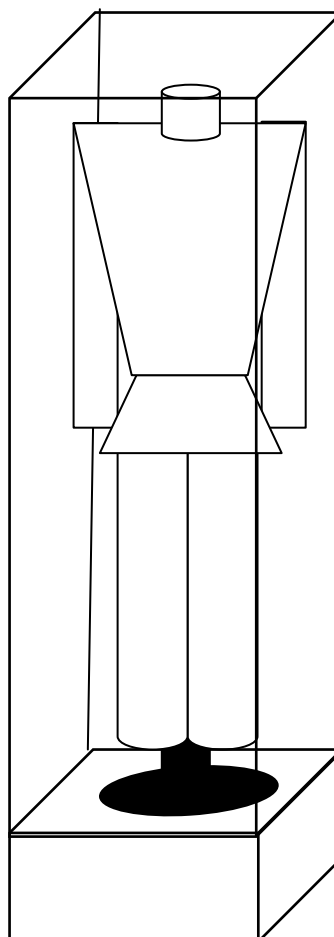
日本で礼服として着用し出した頃の実物およびそれを着ている様子の写真や絵画
現在も使用する機会が多い「ビジネスマナー」についての体験展示および解説パネル展示
現在のスーツの実物展示

⑥・・・『おわりに』 パネル展示

展示レイアウト

実物の軍服・スーツを展示する場合は、ガラスケースに入れ、四方から見るようにする(右図参照)。

ガラスケースは展示品に紫外線等のダメージを与えない、人がぶつかっても問題ない等の特徴を持つ素材を使用する。
写真・絵画の展示においても各展示品の保護の必要性に応じて素材を選択する。





男子礼服の祖となる服「ジュストコール」が17世紀末フランスのルイ14世時代に現れた。1670年頃から上流階級を中心に用いられた上着(上衣)で、18世紀には「アビ」の呼称が一般的となり、ルイ16世時代にはジュストコールの名は消えて行く。

宮廷的貴族服として形をととのえたジュストコールは、金銀の縁取り、刺繍によって階級を示したり、ルイ14世の勅許服(宮廷貴族の中でも限られた人のみが着用が許される服)のように、身分、特権を示すものとして用いられた。

また、ジュストコールの登場は、上衣、ヴェスト、キュロットという男子服の三部形式を確立させた。そして、ジュストコールの呼称が消えても、アビ、フラック、モーニング・コート、タキシード等にその基本形が受け継がれており、今日の男子礼服の祖をなすものといえる。



広義には衣服全般を指し、狭義には18世紀以降今日までの男子の礼服用上衣をさす。

ジュストコールが18世紀にフランス風衣服＝「アビ・ア・ラ・フランセーズ」と呼ばれて、ヨーロッパ中で広く用いられた。

18世紀半ば近くには優雅なロココ調からさらに形が洗練され、華やかなアビが好まれた。しかし、18世紀後半になると、英国風のフラックやルダンゴートが主流になり、華麗なアビは宮廷的な儀礼服装として特別な場合にのみ着用されるようになる。

その後、アビはフラック、ルダンゴートの影響を受けて18世紀末には折返しの衿がつけられるようになり、フランス化したフラックと区別が付きにくくなる。19世紀には、上質の黒羅紗で作られる儀礼服アビ・ノワール、ドレス・コート、フラック、燕尾服(アビ・ア・クウ・ド・モリュ)、ティルド・コート等と称されるようになる。1870年頃からはモーニング、タキシードなどの略装が現れて、準礼服として広く用いられるようになり、アビは正礼装の場合のみの形式的なものになる。



1770年代、フランスでは華やかなアビ・ア・フランセーズ(ジュストコール)が用いられていたが、1780年頃、イギリスから「フロック」が導入され、男子服簡略化の傾向にそって大流行した。1820年以後、王政復古時代に男女の服装が再び貴族調となると、上層階級の紳士達は気取った型のフロックを愛用し始めた。フロックはのちに宮廷用または公式の正装として残されるほど洗練されるが、一般市民は実質的なフロックを愛用した。19世紀半ばには、ヴェストン、ジャケット、スモーキング等が現れたため、英国式のフロックは社交服となり、黒いフロックに縞、格子、あるいは淡色のズボンをはき、白いジレを用いることが慣例となった。このスタイルが今日のモーニング・コートと称する正装と関連性をもっている。礼装化したフロックに代わり、「タキシード」が登場した。



17世紀末に英国軍隊で防寒用や悪天候の時に用いられた外套。1725年頃フランスに伝わり、18世紀後半のフランス・モードに取り入れられた。ルイ16世紀時代には形も材料も洗練された優美なものになり、礼装化されたアビに代わって、フロックとともに用いられた。

19世紀に入ってルダンゴートは実用的な長い外套として用いられ、19世紀半ばには礼装として残り、それが現代の日本でも用いられたフロック・コートになった。



17～18世紀に着用されたジュストコールが単純化されたもの。スワロー・テール・コートとも呼ばれ、黒を主体としている。日本では「燕尾服」と称されている。19世紀半ばには簡易なスーツが現れ、ドレス・コートは通常着から夜会用に昇格して正装となり、色は黒・濃紺が中心となった。夜会の招待状に「白タイ」と示されていれば燕尾服、「黒タイ」ならタキシードでご出席を…という意味。



ルダンゴートが洗練された形になった「アビ・ルダンゴート」という礼服が原型。19世紀後半から男子の昼間礼服として広く用いられた。正式にはシルク・ハットをかぶる。

日本には幕末に渡来し、燕尾服とともに男子用礼服として用いられた。明治23年開設の帝国議会の通院にはフロック・コート着用が礼儀とされ、大正時代には、礼服、外出着、事務服など利用範囲が広がったが、昭和に入るとモーニング・コートがこれに代わり、外出着や事務服などは背広が一般化したため、現在ではフロック・コートはほとんど用いられていない。



本来は男子の乗馬服または身体にぴったり合った長外套であったが、今日では女子のアフタヌーン・ドレスにあたる男子の礼服になっている。しかし、同じ頃(1895年)男子服のデザインを応用した女子用のモーニング・コートも誕生した。

日本ではフロック・コートと同様、幕末から明治にかけて渡来し、男子用礼服として用いられた。明治40年代に入って利用する人が目立ち、大正時代にはフロック・コートに代わって着用が多くなり、背広とフロック・コートの中間型として用いられた。昭和に入り、モーニング・コートは礼服として定着し、現在でも儀式的な正式な礼服となっているが、ダーク・スーツが代わって用いられることもある。



1860年頃、今日のような同一の生地、同一の色による三つ揃いの背広型が形成された。モーニング・コートのスカートを切り落とし、短い上衣、もとい背広が広まった。モーニング・コートやフロック・コートは正装となり、1860年頃には背広服は日常着として定着した。

フランス革命後は英国が紳士服王国となり、WW2前には日本の有名人等も英国から流行を取り入れていた。しかし戦後、1960年ごろまではアメリカが紳士服の中心となり、60年以後はローマ・オリンピックを機会にイタリア・モードが認められるようになった。近年、アメリカはイタリアなどヨーロッパ感覚を取り入れ、量産性のある米国独自のシルエットを打ち出し、世界の需要にに応じている。

今日流行している背広服の傾向は、以下の三種類である。

- ① 品格があり、中年以上の紳士に着用される伝統的な「英国調」。
- ② 仏・伊のムードを取り入れた現代的で個性的な「コンティネンタル調」。
- ③ 比較的若い層に好まれるカジュアルな「米国調」

